

『嵐が丘』の一翻案

— 『“文学少女”と飢え渴く^{ゴースト}幽霊』について—

渡辺 美樹

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

1. 『嵐が丘』の翻案小説について

エミリ・ブロンテの『嵐が丘』は、映画、劇、小説、漫画といった様々な形態で翻案化¹⁾されている。日本では2002年に水村美苗がキャサリン、ヒースクリフ、およびエドガーの三角関係をクローズアップした形で『本格小説』という『嵐が丘』の翻案小説を書いた。『嵐が丘』は、語り手兼視点人物のロックウッドが家政婦ネリーから聞いた話として語るヒースクリフとキャサリンの物語を、作品には登場しない作者エミリ・ブロンテが著述したという形式になっている。『本格小説』では、この『嵐が丘』の語りに入れ子構造を模したうえに、さらに小説家水村美苗本人がロックウッドから家政婦ネリーとヒースクリフの関係を含めてすべての話を聞くという二重の入れ子構造を取っている。主題を三角関係に置き、当事者としてはヒースクリフ一人が生き残るこの作品と原作との一番大きな違いは、キャサリンと同名の娘（同名で紛らわしいのでこの論文ではこれ以降娘の方はキャサリン二世と表記する）の世代の話が欠落していることである。もう一つは小説家本人が登場し聞いた話を『嵐が丘』のような話だと思い、その後小説に仕立て上げていく点であろう。

2006年に新たに出版された『嵐が丘』の翻案小説、『“文学少女”と飢え渴く^{ゴースト}幽霊』は、野村美月の“文学少女”シリーズ（2006～2008年）第二作目にあたるもので、『本格小説』と同様に『嵐が丘』の語りの方を模し、主題を三角関係に置いており、ヒースクリフ一人が生き残る点も水村の翻案小説と同様である。さらに、『本格小説』では小説家本人が登場してこの話を小説にしたように、この作品でもロックウッドに相当する井上心葉^{この井}が後日この話を小説にするという設定になっている。事件の核心人物雨宮螢（キャサリン二世に相当）から身の上話を聞いた語り手麻貴（家政婦ネリーの語り手としての役割を引き継ぐ）は、螢本人に『嵐が丘』を読むようにと勧め、螢は話が自分の個人史と似ているために読むのを放棄したほどであった。このことが示すように、『嵐が丘』をはっきりと意識して書かれた作品であるために、水村の翻案

小説『本格小説』との類似点も多いのであろう。

この翻案小説と『本格小説』との最大の相違点はキャサリン二世の存在にある。『本格小説』では欠落していたキャサリン二世が、『“文学少女”と飢え渴く幽霊』では中核に据えられているからである。こちらの物語は、国枝蒼（ヒースクリフに相当）が、「魂の片割れ」（304）であった亡き夏夜乃（キャサリンに相当）に生き写しの娘蛍（キャサリン二世に相当）の殺害を思い立つところから始まっている。17年前に、蒼は夏夜乃から雨宮高志（エドガーに相当）と結婚すると聞くと失踪し、自分へのこの裏切りに対して復讐しようとするが、帰国してみると夏夜乃は既に死亡していた。そこで蒼は、母親に生き写しの蛍を夏夜乃の身代わりとして復讐をはたそうと考え、蛍の叔母と結婚して義理の叔父となったうえで、蛍の父親と叔母を死に至らしめる。これは蒼にとって復讐であると同時に、蛍を身代わりとすることで、夏夜乃と過ごした「失われた時間」（255）を取り戻そうとする行為でもあった。しかしその蛍が余命幾ばくもないと知り、悲嘆のあまり蛍を殺害しようとするのである。このように、キャサリン二世の存在こそがこの二つの翻案小説を大きく隔てるものとなっている。

2. 語りの手法について

この翻案作品『“文学少女”と飢え渴く幽霊』は、語り手兼視点人物の高二の井上心葉によって一人称で語られる物語と、高三の麻貴が書き記した「彼と彼女の物語」（「彼」は蒼、「彼女」は蛍を指す）という二つの部分から成り立っている。その物語を麻貴は、蛍の死後に蛍の日記として棺の中に納めているので、現実には誰も読むことはできなかったはずである。したがって実際には麻貴が書いたとされる「彼と彼女の物語」（294）をこの物語の作者が麻貴の視点から創作したことになる。

“文学少女”シリーズはすべて井上心葉が高二の三学期以降に書いていった作品という設定である。第一作目『“文学少女”と死にたがりの道化』のプロローグ（7）で再び筆を執ることになったのは文学少女との出会いがあったからだと述べていることから明白である。井上心葉は、中三の時に「謎の天才覆面美少女作家井上ミウ」として処女作で文学賞を受賞するという経歴を持つが、この処女作品を書いたのは、実は女主人公のモデルにした美羽に自分の心情を打ち明けるためだった。ところがこの受賞はかえって美羽を傷つけることになり、彼女の自殺未遂事件が目の前で起きてしまう。ショックのあまり心身症となった心葉はこの受賞作だけで筆を折ってしまう。一年先輩の“文学少女”天野遠子と高校で親しくなることによって徐々に心身の健康を取り戻した心葉は、高二の間に“文学少女”と一緒に体験した出来事を事件ごとに一冊の本にまとめるようになる。最終巻のエピローグを書いている時点で心葉は少な

くとも23歳にはなっている。つまり“文学少女”シリーズには心葉が再び小説を書くようになった経緯を物語るという大きな枠組みが存在する。この枠組みから見ると、この翻案作品はその中の「彼と彼女の物語」までも含めて心葉の作品ということになってしまう。「彼と彼女の物語」の创作者は語り手麻貴ではなく心葉なのである。ネリーの語りネリーの語りのままでロックウツの語りの中に包摂されて入れ子構造になっている『嵐が丘』とはこの点で違っている。

「彼と彼女の物語」の外枠をなす物語の語り手兼登場人物として心葉は、雨宮螢を事件の中心に置き、時間軸に沿って一人称語りで物語を語っていく。それは、高二の一学期期末試験一週間前から期末試験後までのおよそ三週間あまりの時間の経過のうちに起きた出来事、つまり螢を見知った時から螢の葬式までの物語である。心葉は、途中まではロックウツと同じく語り手に徹しているが、やがて時間を巻き戻して各々の至福の時を再現しようとする蒼と螢に自分自身と大好きだった美羽を重ね合わせていき、語り手から登場人物へとしだいに変化していく。例えば、時間軸から言えば次作に当たる『“文学少女”と月花をだ孕く水妖』の中で、心葉は登場人物の流人（出会った瞬間からキャサリン二世に惹かれるヘアトンに相当）に、心葉を巻き込んだせいで「計画が狂ってしまった」（199）と述懐させている。

心葉には、「魂の半分」（95）である美羽を失ってしまった現実から逃避するために、自室に籠城することで美羽との至福の時を取り戻そうとした経験があり、時間を巻き戻すことは心の病に罹患しない限り不可能であるとよくわかっていたからこそ、心の病が原因で拒食症になっている螢に共感を抱き、彼女に美羽を重ねつつも、積極的に関わり合いになるのを避けていた。それでも最終的には心葉は、美羽の投身自殺を目撃しながら止められなかった悔恨の情から、螢の自殺行為を阻止する行動に出る。螢は蒼を挑発することで最終的に自分自身と蒼の死を招こうとしたのである。この点で心葉は、語り手に過ぎない『嵐が丘』のロックウツ像を逸脱している。ロックウツはネリーの薦めにしたがってキャサリンに恋を仕掛けることもできなかったのに、心葉は登場人物として「彼と彼女の物語」に介入していくからである。

心葉の物語に挿入されたもう一方の物語「彼と彼女の物語」は、麻貴が紡ぎ出す三人称の物語という体裁を取って蒼と螢の過去を太字体で物語る。蒼は、母親に生き写しの娘螢を夏夜乃の身代わりとして、夏夜乃と過ごした子供時代という至福の時を取り戻そうとするが、その身代わりの螢に死期が近いことを知って、再び夏夜乃に裏切られる（＝置き去りにされる）ことを恐れ、その形代である螢を絞殺しようとする。螢に自分が夏夜乃の身代わりにすぎないことを告げられて、時を巻き戻すことはできないと悟り、その結果、蒼は心の病である拒食症に陥る。そして迫り来る螢の死（＝

至福の時の非在)に耐えられずに姿を消すが、その蒼を蛍は取り戻そうとする。蒼は幼いときから蛍のあこがれの人であり、蛍にとっての至福の時とは蒼と過ごす日々にはかならない。蒼が父親であることを知った後もなお蛍は父親に恋愛感情を抱き続け、そのために蛍もまた拒食症に苦しむことになる。「彼と彼女の物語」は、至福の子供時代を取り返せなかった物語であると言える。

『嵐が丘』において、家政婦ネリーは単なる語り手ではなく、登場人物として「彼と彼女の物語」を支配しようとしていた。その点では麻貴も同じである。しかし、キャサリン二世とヘアトンの結婚は二人を育てたネリーにとって望外の喜びであったが、一方蛍の希望を叶えるという麻貴の目論見は失敗に終わる。祖父の絶大な権力下におかれ、自分を祖父の操り人形に過ぎないと感じていた麻貴は、憎悪と同時に愛情の対象でもある実父の恋人であろうとする蛍の「縛られない魂」(306)に憧れ、その奔放な精神の持ち主である蛍の希望を叶えることで、満たされない自分の欲望を満たそうとした。単なる語り手になるのではなく、二人の恋の成就という物語を生み出す作者になろうとしたのである。かくして蛍の「彼と彼女の物語」を支配しようとするが、登場人物を意に沿わせることができず、果たせない。最終的に麻貴は、その物語に潜む『嵐が丘』の構図を看破した“文学少女”天野遠子(『嵐が丘』には相当する人物はいない)にその物語の解決を委ねてしまう。

天野遠子は、あらゆる文学作品の読み手として、『嵐が丘』に酷似した「彼(蒼)と彼女(蛍)の物語」の真相を見抜き、その物語にヒースクリフとキャサリン二世との父娘関係という別な解釈を施すことでハッピーエンドへと導こうとする。蛍が隠蔽した蒼と父娘関係を蒼本人に説明し、二人の和解を求めるのである。蒼にとっての恋人はあくまでも自分の母親であることを知った蛍は、蒼を「おとうさん」と呼び、そのまま一週間後に亡くなる。

語り手心葉を媒介にして設定された「現在」という基準点は、「彼と彼女の物語」がほぼ終わりに達している(蛍の葬式でこの物語内の時は終わる)段階で始まるので、「推理小説(whodunit)」のプロットの形態に相似する。外郭をなす心葉の物語に挿入される形の「彼と彼女の物語」は、姫倉麻貴が中学の後輩にあたる雨宮蛍から聞いた身の上話をもとに半年かけて創作したもので、全ての出来事がどういう理由で起こったのか、説明している。『嵐が丘』も二人の語り手の存在によって物語が進行し、推理小説のように読者が謎解きを強いられている。実際にヒースクリフの死とキャサリン二世とヘアトンの結婚予告で終わり、語り手ロックウッドを媒介にして設定された「現在」という基準点もまたヒースクリフの復讐がほぼ終わってから始まるので、この点でもこの作品は『嵐が丘』を模したものであるといえる。

3. 登場人物について

『“文学少女”と飢え渴く幽霊^{ゴースト}』は、一作目と同様に高校生の恋愛を描いた学園もので、恋愛の手助けをすることをうたったポストに入れられた手紙—蛍が書いた解読できない数字の羅列—から始まっている。この作品は高次の少女蛍の父親に対する激しい愛憎の経緯を物語ったものである。恋愛をテーマにするという点では、その源流を明治期の少女小説に遡ることのできるライト・ノヴェルのお馴染みの範疇に属しているともいえる。

蛍や蒼の持つ愛憎の激しさを描き出している点でも、この作品は激しい情念を描いた『嵐が丘』の翻案であるといえる。しかも『嵐が丘』の語りの構造を模した結果、そのプロットをも模倣している。にもかかわらず両者は結末において違ってくるのである。ヒースクリフが生き残り、キャサリン二世が亡くなるのである。

唯一蛍が残した流人への遺書には、次のように蛍の心情が吐露されている。

あの人も、お父さんも、叔母さんも、みんなわたしを通してお母さんを見ていたの。みんなが好きだったのはお母さんに似たわたしで、わたし自身じゃなかったの。けれど、流君は、最初から“蛍”を見てくれた。わたしを好きだって言ってくれて、わたしに、おまえは雨宮蛍だって言ってくれたね。… 流君と一緒に昼の世界で生きられたら、蛍はきっと、あの物語（ジョージ・マクドナルド作『昼の少年と夜の少女』引用者注）の女の子のように幸せになれたと思う。けれど、わたしは、あの夜しかない部屋を出ることはできなかったよ。あそこでしか、わたしは暮らせなかったの。天国よりも、どこよりも、わたしはあの場所にいたかったの。（312-3）

キャサリンが子供時代を過ごした荒れ野に戻りたかったように、蛍が望んだのは、たとえ今は夏夜乃の身代わりであろうと、やがて長ずれば蛍を恋人として蒼が認めてくれるかもしれないと思えた至福の時を過ごした場所、あの地下室に身を置くことだったのである。

蛍の原型である『嵐が丘』のキャサリン二世は、年下の病弱な従弟であるリントンに対して気遣う母親のような心情を恋愛紛いの感情へと発展させていくが、最終的にリントンに幻滅する。リントンは、妻を自分の世話をすべき人間と心得ているだけの男であった。二人は結婚はしたものの、二人の間に恋愛が成立したとはいえない。二人目の相手へアトンに関していえば、知り合っただけの段階では、キャサリン二世

は彼が下僕の身分であるを知って軽蔑する。さらに、無学の彼をリントンと一緒にあって笑いものにしさえする。しかし、あこがれの人となったキャサリンに軽蔑されないために、ヘアトンが向学心に燃えるようになり、その教師役をキャサリン二世が務めることで、二人はしだいに愛情をはぐくみ、結婚へと至る。『“文学少女”と飢え渴く^{ゴースト}幽霊』では、キャサリン二世に相当する蛍を中心人物に据えて物語が進行し、「彼と彼女の物語」の語り手、麻貴は、キャサリン二世の結婚というハッピーエンドに近づけようと、登場人物として彼（＝蒼）と彼女（＝蛍）を操ろうとするが、どうしても物語はモデルから逸れていってしまう。その原因を麻貴自身は蛍がお上品なエドガー（＝雨宮高志）の娘ではなく、「熱と稲妻で作られたヒースクリフの娘」（305）だったから起きたことだと解釈する。

こちらの物語では、蛍の母夏夜乃が一人っ子であるという想定のため、蛍の従弟は存在しない。蛍が思いを寄せるのは、蒼に対してである。後見人として蛍と一緒に暮らしていた蒼は、蛍が不治の病に冒され余命幾ばくもないと知り、自分の愛した夏夜乃ばかりか身代わりの蛍までなくしてしまうのに耐えきれず、屋敷を出ていってしまう。それに対して蛍は、蒼の注意をひくために次々と不良たちとの付き合いを始める。流人との交際も蒼の視線を感じていたいがために始めたものである。流人は嵐の夜一人で公園のブランコをこぐ蛍を見て、恋人を他人に取られるよりは殺してしまうことを考えるほどの激しい感情の持ち主であると直感して交際を始め、蛍のことを知ろうと蛍と同じ高校に通う心葉とともに身辺調査を始める。しかし『嵐が丘』のキャサリン二世とは違って、蛍が流人の気持ちを受け入れることはなかった。これは蛍が、献身的に愛されるよりも、マゾヒスティックなまでに自分の身を捧げることをのぞんでいるからであろう。

翻案作品が原作とずれていくのは、蛍が実の父親が蒼と知ったのちも、蒼を父親として慕うのではなく、蒼の恋人であろうとするからである。この時点で既に流人がヘアトンのように恋人として受け入れられる可能性はなくなってしまったといえる。残された命がごくわずかであることを知った蛍は、蒼が父であると告げる母からのメッセージを消し去っていく。抹消する対象は、贈り物の本に記された母の蒼への思いや、母が高校在学当時に書き記した落書きにまでおよぶ。母である夏夜乃の残した蒼へのメッセージをこの世から抹消すれば、娘である自分の蒼への思いが通じると信じているかのように、全てを消し尽くしたのである。

さらに、蛍は、他の人と結婚するといって蒼を呼び出し、蛍にとって「至福の時」であった蒼との二人きりの時間を、自分が殺されることで、つまり一種の無理心中によって取り戻そうとする。以前にも、蛍は蒼に絞殺されるのを望みながら、蒼が口に

した「裏切り者の夏夜乃」という言葉を聞いて、蒼がどこまでも母の身代わりとしてしか自分を見ていないことに気づき、その場を逃れたことがあった。母親の^{ひとかた}人形にすぎないからこそ、蛍はこのようにマゾヒスティックな愛情表現をとるのであろう。今回企てた蛍の無理心中は、ピストルをもつ蒼を挑発することで自分自身を殺させ、我に返った蒼に自殺を謀らせるというものであったと思われる。こうすることによって、二人は共に天国に行くのではなく、地獄に堕ち、永遠の時を共に暮らすことができる。蛍は考えたからである。この試みは、ある意味で「時間を巻き戻す」(96)ことはできないと知った心葉によって阻止され、蛍は蒼を父親と認めて死んでいくことになる。

父親と叔母が相次いで亡くなった後、蛍の後見人は、義理の叔父、国枝蒼こと黒崎保となる。蒼は外国から黒崎として戻り、夏夜乃が自分を裏切って他の人と結婚したことへの復讐として、夏夜乃に生き写しの娘、蛍を夏夜乃として蘇らそうとするのである。彼は夏夜乃と至福の時を過ごした九條の屋敷に蛍と二人きりで暮らし、それを再現しようとする。夏夜乃が自分の後見人の横暴から蒼を守るため蒼以外の人の作った食べ物を一切拒んだように、蒼は蛍にも他の人が作った食べ物を食べさせず、食べた場合は罰として数日間秘密の部屋である地下室に食事抜きで閉じ込めるというやり方で蛍をコントロールする。夏夜乃の格好をさせ、二人の秘密の暗号を教え、家にいるときは夏夜乃として行動させる。

昼の間は蛍であっても夜になると夏夜乃となる蛍は、夏夜乃の幽霊にすぎない。このような仕打ちに耐えることができたのは、蛍自身にとって蒼が初恋の人であったからだ。母親が打ち明ける内密の話を聞くうちに、蛍は母の大好きだった人蒼に憧れるようになる。彼女は母親のもっていた写真を元にひそかに蒼の肖像画を描き、黒崎の正体が蒼であることに気づいても、父親の雨宮高志にも叔母の玲子にも話そうとはしない。蛍は蒼に母の身代わりとしてではなく、蛍自身のことを見て欲しかったし、愛情を捧げて欲しかったのである。しかしながら、16歳の誕生日に、母親が人を介し時を隔てて娘に贈ってよこした『昼の少年と夜の少女』という本に書き添えられた母の告白、蒼が父であるという告白を見て、蛍は拒食症に陥る。さらに、蛍の余命わずかであると知った蒼の出奔という事態に遭って、蛍は夏夜乃の幽霊となって学校にも出沒するようになる。初恋の人との「至福の時」(＝夏夜乃として過ごした時)を取り戻すためである。蛍という名については、夏夜乃に身体までも奪われてしまったという感覚のために、夜ほのかに光る生物の名前をもらったのであろう。『嵐が丘』では、この二重分裂の感覚を味わうのはキャサリンであった。蛍がキャサリンと同様に死んでいったのは、まさにこのためではないかと考えられる。

『嵐が丘』において、キャサリンはヒースクリフと二人で野生児さながらに自由奔放で無垢な子供時代を送っていた。「自分自身よりもっと自分らしい」(Norton, 122) ヒースクリフはキャサリンの分身である。キャサリンは性に目覚めるとすぐお屋敷で文化的な生活を送るエドガーに魅了されて結婚する。その結果、彼女はこの文化的な生活に適応するために教育されて淑女に変身しなければならなかった。このことは、彼女の内にある野性的な分身ヒースクリフを抹殺することであった。キャサリンにとっての「天国」(120)とは荒野—自然—にほかならない。文化的なお屋敷はキャサリンにとって牢獄に等しい。さらに妊娠が野生児キャサリンにとって抑圧となる。三日間にわたる拒食の後、精神錯乱を引き起こしたキャサリンは、ついに窓を開け放って荒野からの新鮮な風を呼び込むことで今まで抑圧してきた野生児としての自我を解放する。キャサリンの精神は「子供」と「大人」に分裂してしまい、「大人」としての出産に耐えきれなかった。結局彼女は産褥の床で亡くなる。キャサリンの拒食は自然児キャサリンが女性としての成熟を拒否したことを示している。語り手ロックウッドが見るキャサリンの幽霊が子供であるのはこのためだと言えよう。

『“文学少女”と飢え渴く幽霊(ゴースト)』の中心人物蛍は、自己が蛍と夏夜乃に分裂し、母夏夜乃の方が本来の自己であった蛍までも支配するようになったことに耐えきれずにこの世を去ったと考えることも可能である。ここには蛍とキャサリンとの共通性がある。母親夏夜乃は、原作のキャサリンとは異なり、亡くなってからも娘を支配し続けた。一方『嵐が丘』でキャサリンが支配するのは、娘ではなく、ヒースクリフである。この点も原作とこの翻案小説との違いである。

『嵐が丘』において、ヒースクリフもまた餓死を選ぶ。自らの分身キャサリンを取り戻せないからである。キャサリンが今も地上を彷徨っていると感じていながら、彼にはその姿を見ることができない。現実の世界はその喪失をますます強く想起させるものでしかなくなっている。ヒースクリフの四日間にわたる拒食は自分の体を脱ぎ捨てて魂を解放するための行為である。拒食死の後キャサリンが子供の幽霊として蘇ったように、ヒースクリフも同じ拒食死を通過することによって蘇ることを望んだのである。棺桶の中のキャサリンの死体が朽ちないように気を使っていたのは、魂の帰る場所を失うのを恐れたのだろう。二人の亡霊は荒野で暮らす人々に何度も目撃されている。キャサリンもヒースクリフも拒食を転生の手段として利用している。

以上見てきたことから、『嵐が丘』との相違点としてまず挙げられるのは、娘の蛍が母親夏夜乃に支配されていたために実の父である蒼にしか愛情を捧げることができず、そのため死んでいくという点である。母親の身代わりと見なされている蛍は、母親が妊娠した年齢を考えれば、蒼と性的関係を結んでいた可能性があり、そ

れが原因で拒食症に陥ったと解釈することもできる。斉藤学²⁾によれば、拒食症に陥った少女が医師に近親相姦を訴えることがあるという。また次作『“文学少女”と穢名^{けがれな}の天使^{エンジェル}』の中で、生活費のために援助交際をする登場人物の夕歌が「穢れた女」(240)と見なされていることと照らし合わせれば、「実の娘を穢したという罪」(274-275)を負ったと非難される蒼は、蛍を娘とは知らずに近親相姦の罪を犯したと推測できる。時を巻き戻すことのできなかつた蒼の拒食症は蛍の死後も悪化の一途を辿る。「屋敷に引きこもって餓死しかけてた」(180)と麻貴が最終巻『神に臨む作家^{ロマンシエ}下』で述べている通りである。蒼が3年後に生まれた自分の娘に蛍という名前をつけたのは、蛍に対して罪悪感を抱き続けていたからであろう。

恋人への復讐の手段として蒼が生き写しの娘をその母親の形代とする経緯には『源氏物語』の紫の上や浮舟に通じるものがあり、その意味ではこの作品は、男性が女性に教えるという行為を通して愛情を作り上げ結婚に至る英文学の伝統とは対照的である。桐壺帝の中宮の形代(身代わり)として源氏に養育された紫の上が幸せであったとしたら、仏門に入りたいと願うことはなかつたであろう。また大君の形代として薫に引き取られた浮舟も、現世に満足できなかつたからこそ仏門に下つたのであろう。よって母親の形代として引き取られた蛍の人生が決して明るいものではなかつたのも故のないことではない。

4. 結論

以上見てきたように『“文学少女”と飢え渴く幽霊^{ゴースト}』は、エミリ・ブロンテの『嵐が丘』の語りの方、登場人物およびプロットを模して作られた翻案小説である。翻案小説が原作を解釈したものであると考えるとすれば、この翻案小説は色々な点で軽視されがちなキャサリン二世を重視した点³⁾に特徴があるといえる。この翻案小説では、キャサリンとヒースクリフを特徴づける激しい感情をキャサリン二世にも受け継がせている。このことは、原作の『嵐が丘』でキャサリンが妊娠するのが出奔したヒースクリフが嵐が丘に戻ってきからであるということを見ると、キャサリン二世の父親がヒースクリフであってもよかつたという翻案小説のメッセージであるのかもしれない。逆に言えば、原作では、キャサリン二世の父親がエドガーであることに疑いをもたれないようにするために彼女は性格がエドガーに似て穏やかであるとネリーによって語られたのであろう。

注

1) 『嵐が丘』の翻案については、川口喬一『「嵐が丘」を読む—ポストコロニアル批評から「鬼丸物語」まで』(200-272)を参照した。水村美苗の『本格小説』はその中に取り上げ

られている。

2) 齊藤学編『カナリアの歌—“食”が気になる人たちの手記』が詳しい。またこの現象はアメリカ等でも報告されている。

3) キャサリン二世の世代を猥雑物とする見方は古くはサマセット・モームやアーノルド・ケトルが主張していた。ワイラー監督やジャック・リヴェット監督の映画『嵐が丘』でもヒースクリフとキャサリンに話を絞っている。一般的には『嵐が丘』はヒースクリフとキャサリンの狂おしい愛と情念の物語と捉えられていることが多い。

参考文献

川口喬一『「嵐が丘」を読む—ポストコロニアル批評から「鬼丸物語」まで』(2007, みすず書房)

河添房江『性と文化の源氏物語—書く女の誕生』(1998, 筑摩書房)

齊藤学編『カナリアの歌—“食”が気になる人たちの手記』(どうぶつ社, 1991)

齊藤環『母は娘の人生を支配する—なぜ「母殺し」は難しいのか』(2008, 日本放送出版協会)

立石和弘『男が女を盗む話—紫の上は「幸せ」だったのか』(2008, 中央公論新社)

野村美月『“文学少女”と死にたがりの道化』(2006, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と飢え渴く幽霊』(2006, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と繋がれた愚者』(2007, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と穢名の天使』(2007, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と慟哭の巡礼者』(2007, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と月花を孕く水妖』(2008, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と神に臨む作家 上』(2008, ファミ通文庫)

野村美月『“文学少女”と神に臨む作家 下』(2008, ファミ通文庫)

廣野由美子『「嵐が丘」の謎を解く』(2001, 創元社)

藤井貞和『タブーと結婚—「源氏物語と阿闍世王コンプレックス論」のほうへ』(2007, 笠間書院)

水村美苗『本格小説 上』(2002, 新潮社)

水村美苗『本格小説 下』(2002, 新潮社)

(Ed.) Harold Bloom, *Emily Brontë's, Wuthering Heights*, 1987, Chelsea House

Emily Brontë, *Wuthering Heights*, 1930 (rpt. 1847), Oxford University

Emily Brontë, ed. William M. Sale Jr., *Wuthering Heights*, 1972, W. W. Norton

Katherine Frank, *A Chainless Soul: A Life of Emily Brontë*, 1990, Houghton Mifflin